



河合文化教育研究所  
主任研究員 丹羽健夫

# 教育を 読む

古代から現代までの日本を、外国人の目から見た見聞録二十一編を追ったものである。ただし冒頭の陳寿著『魏志倭人伝』は弥生時代後期に書かれたもの、二番目のマルコ・ポーロ著『東方見聞録』は鎌倉時代に書かれたもので、いずれも当然のことながら書いた本人は日本に来ておらず、風聞伝説にもとづくものである。三番目の十六世紀の宣教師ザビエルの『書簡』から後、シーボルトの『江戸参府紀行』、アーネスト・サトウの『一外交官の見た明治維新』、ラフカディオ・ハーンの『知られぬ日本の面影』などの十八編の著者は、いずれも日本の地を踏み、日本人に親しみ日本の風土を体感している。例外は十九番目の『菊と刀』の米人ルース・ベネディクトのみである。ルースは第二次世界大戦中、戦時情報局に所属し、本書は敵国情報掌握の目的で書かれたものである。



## 『古今東西 ニッポン見聞録』

林 和利 著  
風媒社  
定価 1,500 円+税

織田信長に謁見した宣教師ルイス・フロイスの『日欧文化比較』で面白いのは、女性が文字を書くことに驚いていることだ。「われわれの間では女性が文字を書くことはあまり普及していない。日本の高貴の女性はそれを知らなければ価値が下がると考えている」

また日本の女性が酒を飲むことに驚いている。「祭の時にはしばしば酔払うまで飲む」—そうか昔からそうだったんだ（筆者感慨）。

また子供がしっかりしていることに感心している。「思慮深さにおいて十歳でも五十歳も見られる」

フロイス以降の人々も日本を賞賛する声が多い。人々が礼儀正しい。貧富の差が少ない。きれい好き。美意識が高い。好奇心が強い—ただし物見高い。そして自然が美しい。富士山、瀬戸内海。

また趣味がいい。生け花、お茶、庭園作り、演劇鑑賞。そして治安がいい。だいいち家に鍵がない。

人間が落ち着いている。関東大震災の折、駐日フランス大使であった劇作家で詩人のポール・クローデルは「地震の日の・・・生存者たちが

群れ集った巨大な野営地で過ごした数日間、私は不平一つ聞かなかった」と語っている。

ラストの隣国韓国の李御寧（イー・オリョン）の「縮み志向」の日本文化論が秀逸である。韓国には大韓航空など拡大志向の接頭語はあっても、「縮み志向」のそれはない。これに反し、日本には「豆」「ひな」などの「縮み志向」の接頭語がある。豆本、豆自動車、豆人形、豆皿、豆一口ソク、豆ランプ、豆電球、ひな人形、ひな形などがそれである。

そして究めつげが、石川啄木の詩である。

「東海の」と大きくきて「小島の」と縮み「磯の白砂に」とさらに近景に縮み、「われ泣きぬれて『蟹』とたはむる」とついに蟹、涙の一滴にまで縮小してしまうのである。

日本の縮み志向の例として更に「折り詰め弁当」「扇子」「盆栽」「姉さま人形」「岩波文庫」「電卓」「ウォークマン」にまで及んでいく。

そして戦艦大和の拡大志向でなく一寸法師の智慧に学べと結ぶ。そうか、隣国はそう見ていたのか。一読に値する。